

不二のキリスト像

聖心女子大学同窓会宮代会 会長 傍士 朋子

校門を抜け聖心橋を渡ると、あとは心臓破りの坂道。せっせと上りながら左手には鮮やかな緑の茶畑を眺め、右手に聖堂の塔が見えてきた頃には息もきつい。その真正面で迎えて下さるのが両手を広げたキリスト像。

不二聖心女子学院へ入学し、両親のもとを離れての寄宿舎生活は、全てが新しい経験。昨日まで小学生気分であったことは胸の内にとまったつもりでも、夜が来れば寂しくて枕が濡れた。それでも朝が来れば眩しい日差しの中で髪が上手く編めない事に悩んだり、苦手な英語と格闘しながら過ごした日々。シスター、先生方の愛に包まれ、沢山のゆるしの中で多くを学んだ。高校三年生の最上級生がどれほどか大人に見え、あんなふうになりたいとあこがれた。優しさの中にあり、笑い声の中にありながらも常に思考し、私は誰かと問うていたように思う。それは不二にあった不思議な雰囲気であった。思考が停止してしまった時、悲しいことや心配ごとがおこるたびに、ある時は友人と一緒に築山をつききってキリスト像を訪れた。

不二を卒業して四十年近くが過ぎた。大学生時代に一度、その後学年幹事の仕事を二度ほど学校行事に参加したが、煩雑な事柄にかまけてキリスト像を訪れる事はしなかった。多くの困難が、当たり前なでないことを突き付けてくる時、祈ることの意味も問いかけてくる。いつも共にいらして下さる方に救いを求めながら、もやもやとした時は過ぎる。不意を突いて、すっかり忘れていたキリスト像が、ここにいるよと少女の頃と共に胸の奥に蘇った。しばしば不二を訪れている友人にあのキリスト像は今もあそこで迎えて下さるのかと尋ねると、もちろん、いつも同じように。との答え。

無条件に広げられた両手を思いながら我が掌を見る。悲しい涙に共に涙する目を、苦しいと嘆く言葉を静かに聞く耳を、あたたかな言葉を話す口を持ちえたか。不二での時間を反芻しながら、本当に久しぶりに足を運びたいと思う。